平成１２年度

アイヌ語ラジオ講座
テキスト

4月▶6月
Vol.1
2000

講師のプロフィール

高木喜久恵

- 1947年北海道白糠町生まれ
- 20歳頃からアイヌ文化に興味を持ち、30代中頃にアイヌ文化保存会に入会する。
- 平成3年、白糠アイヌ語教室が開講され、そこでアイヌ語学習を本格的に始め、講座の助手を務める。
- 現在、白糠アイヌ語教室講師、白糠アイヌ文化保存会理事、ウタリ職業相談員として活動している。

協力者の紹介

松本　成美

1927年高知市生まれ。白糠中学校在職時代、貫塩喜蔵著『サコロペ』（白糠町役場刊）の執筆協力に当たったのが、アイヌ語学習のきっかけとなる。現在、釧路アイヌ文化懇話会会長、釧路アイヌ語の会会長を務める。

※原稿執筆にあたり、釧路アイヌ語の会会員である宮田久子氏と北道邦彦氏のご助言を得た。

根本与三郎	1918年生まれ	白糠アイヌ文化伝承者
地主義雄	1922年生まれ	白糠アイヌ文化伝承者
時田岩吉	1925年生まれ	北海道ウタリ協会理事
増野光教	1926年生まれ	白糠アイヌ語教室講師
伊賀トシ	1925年生まれ	白糠アイヌ文化伝承者
菊池カヨ	1927年生まれ	白糠リムセ保存会理事

アイヌ語ラジオ講座のスケジュール表

月	回	日	今日のテーマ
4月	1	2日	シラリカとは
	2	9日	サシウシとは
	3	16日	丘の上のチャシ
	4	23日	鹿おろしの神
	5	30日	シシャモ・柳葉魚
5月	6	7日	白糠に伝わるアイヌ語
	7	14日	タンタカ山
	8	21日	白糠のイオマンテ
	9	28日	アイヌ文様
6月	１０	4日	鯨の話
	１１	11日	鮭をとる
	１２	18日	食料をどうやって保存しているか
	１３	25日	白糠の先住者

表記法について

このテキストのアイヌ語の文章は、服部四郎編『アイヌ語方言辞典』の中の美幌・帯広方言と山本多助著『アイヌ語小辞典』を参考にして作られたものである。

表記法は、北海道ウタリ協会刊『アコロ イタㇰ』に準拠している。

【白糠アイヌ語教室の活動について】

白糠アイヌ語教室では初心者向けのアイヌ語をおもに勉強している。その中に増野光教講師の白糠地方の方言等も講座に取り入れている。毎週木曜日（18:00～21:00）にアイヌ文化保存会とアイヌ語教室を交互に開設している。また年に3～4回日曜日に課外授業を開講しています。これの日程はその都度決めて行われます。

白糠町生活館
〒088-0301　白糠郡白糠町東1条南3丁目2
TEL（01547）2-2455

Lesson 1　シラリカとは

今日のポイント
アイヌ語地名としての白糠

今日の一言：
シラㇲ　オイカ
sirar　oika
磯　を越える

シラリカ	アリ	アイェ	フシコ	コタン	レエ	アナクネ
Sirarika	ari	a=ye	husko	kotan	rehe	anakne
白糠	と	いう	昔の	村	の名前	は

コイ	シラㇲ	オイカ	シリ	ネ	クス	アレコレ	ルウェ	ネ
koy	sirar	oika	sir	ne	kusu	a=rekore	ruwe	ne.
波が	磯	を越える	状態	である	ことから	名づけられた	のです。	

サシウシ	ワ	パシクル	パクノ
Sasusi	wa	Pasikur	pakno
刺牛	から	パシクル	まで

ピシカンタ	シラㇲ	アヌカㇲ	エアシカイ	ルウェ	ネ
piskanta	sirar	a=nukar	easkay	ruwe	ne.
ところどころに	磯	を見ることが	でき	ます。	

；単語

- シラㇲ［磯・平磯］
- フシコ［古い（昔の）］
- コイ［波］
- パクノ［まで］
- ヌカㇲ［を見る］
- オイカ［を越す］
- レエ［の名前（rehe のh音がとれる）］
- レコレ［名づける］
- ピシカンタ［ところどころに］
- エアシカイ［できる］

解　説

白糠の磯回(いそわ)七里に打つ波の音(あ)をはぐくみしわが磯回波（歌集「海彦」収）

白糠の郷土の歌人、郷土史家、役場職員であった小助川濱雄(こすけがわ はまお)（1905〜1935）は、白糠の地名の由来を、磯回波（磯をめぐる波）を主題にした短歌（昭和9年作）で見事に表現した。平磯を意味するシラリに、〜の上を意味するカをつなげて、しぶきをあげながら越していく様をシラリカと言い、これに白糠という漢字が当てられたのである。

青森県下北半島(しもきた ひがしどおり)東通村に字白糠があり、千島の国後島(くなしり)北部の太平洋岸に白糠湾があるが、共に磯回波が見られる。

MEMO

「今日の一言」シラㇲ　オイカ／磯を越える
sirar　oika

シラㇲを潮と解するのは誤り。1799（寛政11）年、藤知文(ふじともぶみ)は『東夷周覧(とういしゅうらん)』にシラヌカについて次のように記している。

「シラヌカ夷語(いご)『シラリカ』ナリ　今誤リテ『シラヌカ』と云フ『シラリ』トハ平カナル磯ヲ云…」

Lesson 2　サシウシとは

今日のポイント
刺牛はサシウシの当字

今日の一言：
サシ　ウシ
sas　usi
昆布が　群生する

テエタ	シラリカ	オッタ	サシ	ポロンノ	オカイ	ルウェ	ネ
teeta	Sirarika	or ta	sas	poronno	okay	ruwe	ne.
むかし	白糠	に	昆布が	たくさん	あり	ました。	

サシウシ	アナクネ	サシ	ポロンノ
Sasusi	anakne	sas	poronno
刺牛	は	昆布が	たくさん

シクプ	ワ	アン	ウシケ	ネ	ルウェ	ネ
sikup	wa	an	uske	ne	ruwe	ne.
生え	て	いる	ところ	です。		

；単語

- サシ［昆布］
- テエタ［むかし］
- シクプ［生える（おがる）］
- ウシ［群生する］
- ポロンノ［たくさん］
- ウシケ［ところ］

解　説

江戸時代、白糠場所における松前との交易で、昆布の占める割合は、干鮭とならんで大きな比重を占めていた。昭和年代に入ってからも、海岸どおりの漁師の家には昆布の梱包が山積みにされていた。刺牛海岸は遠浅で、海底には岩礁があり、昆布の育成に適していた。今日では、かつてのような昆布生産の姿は見られず、昆布森沿岸の漁師にその座をゆずったようである。

MEMO

「今日の一言」サシ　ウシ　／　昆布が群生する
sas　usi

昆布をアイヌ語でサシというのは名寄（なよろ）・宗谷（そうや）・樺太（からふと）の地域で、他地域ではコムプ（kompu）と言う。ところが釧路町の昆布森は、コムプ　モイ（kompu　moy）昆布のとれる湾という意味である。さほど離れていない二つの地域に、サシとコムプが共存していることは、大いに注目すべきことである。

Lesson 3 丘の上のチャシ

今日のポイント

刺牛の砦（とりで）

今日の一言：
チャシ　コッ
casi　kot
砦　跡

サシウシ	ウン	チャシ	アナクネ	アイヌモシリ	ウン	チュプカ
Sasusi	un	casi	anakne	aynumosir	un	cupka
刺牛	の	砦	は	北海道	の	東

オッタ	アン	イヨッタ	ポロ	チャシ	ネ	ワ
or ta	an	iyotta	poro	casi	ne	wa,
に	ある	一番	大きな	砦	であっ	て、

インカラ	ウシ	クス	アカラ	ペ	ネ	ルウェ	ネ
inkar	us	kusu	a=kar	pe	ne	ruwe	ne.
いつも見張る	ために	作られた	もの	です。			

; 単語

- チャシ［砦］
- アイヌモシリ［アイヌの静かなる大地（北海道のことをいう）］
- ポロ［大きい］
- カラ［作る］
- コッ［跡・くぼみ］
- チュプカ［東］
- インカラ［見張る］

解　説

刺牛の砦跡は、白糠丘陵の海岸に突き出た丘の上にあり、人を寄せつけない険阻（けんそ）な場所にあるため、昔のままに残されている。

1933（昭和8）年、イギリス人の人類学者ニール・ゴードン・マンロー博士が小助川濱雄の招きで来町し、発掘調査している。この遺跡からは続縄文文化期～擦文文化期に至る間の土器・石器・金属器が出土した。

チャシは、三重の堀によって、崖に面した中央部と、その北部と西部の三つに区分され、堅牢（けんろう）な要塞としての往時のままの形態をのこしている。

MEMO

「今日の一言」チャシ　コッ／砦の跡
casi　kot

チャシは砦、コッは跡とかくぼみという意味である。この刺牛チャシは東方の厚岸（あっけし）、根室、西方の十勝からの敵の襲来にそなえて築かれたものである。このチャシから周囲の眺望はすばらしくよいので狼煙（のろし）をあげて敵の襲来を知らせたという。

Lesson 4　鹿おろしの神

今日のポイント
鹿おろしの伝説

今日の一言：
ユㇰランヌプリ
Yukrannupuri
鹿のおりる山

トカㇷ゚チ	ネワ	クスリ	ウトゥッタ		ウコタキヌプリ
Tokapci	newa	Kusuri	utur	ta	Ukotakinupuri
十勝	と	釧路	の間	に	ウコタキヌプリ

アリ	アイェ	ヌプリ	アン	ルウェ	ネ
ari	a=ye	nupuri	an	ruwe	ne.
と	言われる	山が	あります。		

タアン	タ	カムイ	ユㇰ	ランケ	アリ	アイェ
taan	ta	kamuy	yuk	ranke	ari	a=ye
そこ	に	神が	鹿	をおろす	と	いう

トゥイタㇰ	アン	ルウェ	ネ
tuytak	an	ruwe	ne.
伝説が	あります。		

; 単語

- ユㇰランヌプリ［鹿のおりる山］
- トゥイタㇰ［伝説・物語］
- ランケ［をおろす］

解　説

白糠のエカシやフチが集まると、差間佐七（さしま　さしち）さんから聞いた鹿おろしの伝説についての話が尽きない。むかし、鹿を司る神によって天から鹿をおろす音が雷鳴となってよく聞こえたというのである。

足寄（あしょろ）や白糠地方に鹿が多いのは、ユㇰランヌプリにおりた鹿が峰をつたわって人里へ集まってくるからだと言い、白糠では峰つづきになっている石炭岬や刺牛の岬に酒をあげ、鹿をさげてもらうように神に祈ったという。

MEMO

「今日の一言」ユㇰランヌプリ／鹿のおりる山
Yukrannupuri

十勝と釧路の境に、ウコタキヌプリ（uko-ta-ki-nupuri　お互い・に・する・山）という抱き合っているように見える二つの山がある。この山に鹿を司る神が鹿をおろしたので、ユㇰランヌプリとアイヌは呼んだ。たえずこの山の方向でドドドン　ドドドンという鹿のおりる音がしたという。

Lesson 5　シシャモ・柳葉魚

今日のポイント
シシャモの由来

今日の一言：
ス　ハム　チェプ
susu　ham　cep
柳　葉　魚

スサム	アナクネ	シノ	ケラ	アン
susam	anakne	sino	kera	an.
シシャモ	は	本当に	お美味しい。	

スサム	ペッ	トゥラシ	アラキ	チキ
susam	pet	turasi	arki	ciki,
シシャモが	川	をさかのぼって	来	たら、

コタン	オプッタ	オカイ	ニシパ	ペッチャ	タ
kotan	oputta	okay	nispa	petca	ta
村	中	の	旦那方が	川岸	に

ウウェカラパ	ワ	カムイノミ	ルウェ	ネ
uwekarpa	wa	kamuynomi	ruwe	ne.
集まっ	て	神に祈る	のです。	

；単語

- ス　ス［柳］
- チェプ［魚］
- ケラ　アン［お美味しい］
- アラキ［（ekの複数）来る］
- ペッチャ［川岸］
- ハム［葉］
- スサム［シシャモ］
- トゥラシ［をさかのぼる］
- オプッタ［～中（じゅう）］
- ウウェカラパ［集まる］

解　説

シシャモの由来を物語るシシャモ伝説は、地域によって異なっている。しかし、共通点としては天上界の神が、アイヌを飢餓から救うために柳の葉を魚に造化してアイヌに与えたということである。

鵡川では、神が柳の葉に生命を与えて、シュシュハム（柳の葉）という魚にしてしまったとしている。それで毎年、木の葉の散る頃になると、鵡川にシシャモがのぼってくるのだという。

白糠ではカムイノミをして豊漁を神に願ったところ、大雨の後の川のはやい流れに逆らって柳の葉がのぼってきた。その柳の葉の下に、小魚が群れており、柳の葉をもちあげるようにしていた。それ以来、シシャモのとれる時期になると、シシャモ祭りを行ってししゃもの豊漁を神に祈ることにしている。

MEMO

「今日の一言」ス　ハム　チェプ／柳葉魚
susu　ham　cep

シシャモはス　ハム、またはシュシュ　ハムが次のようになまってできた言葉である。
susu　hamのh音がとれると、susu　amとなる。susuの後のuがamのaにひっぱられて、susamというアイヌ語になった。シュシャムとも言う。

Lesson 6 白糠に伝わるアイヌ語

今日のポイント
古老が話していたアイヌ語

今日の一言：
メノイェ
menoye
寒い

シラリカ	ウン	エカシ	ネワ	フチ	アナクネ
Sirarika	un	ekasi	newa	huci	anakne
白糠	の	エカシ	と	フチ	は

ポン	ヒネ	アイヌ	イタク	ヌ	カネ	スクプ	ワ
pon	hine	aynu	itak	nu	kane	sukup	wa
幼い	ときに	アイヌ	語	を聞き	ながら	成長し	て

ポロクル	ネ	ルウェ	ネ
porokur	ne	ruwe	ne.
大人	になり	ました。	

；単語

- メノイェ［寒い］
- ヌ［を聞く］
- ポン［幼い］
- スクプ［成長する］

解　説

いま白糠でアイヌ語を話せる古老はほとんどいなくなってしまった。しかし、むかし家の中で、儀式や集会の中で、エカシやフチがアイヌ語で会話したり、ウポポを歌ったりしているのを見たり、聞いたりした人が、いまでもかなりの数いる。その一人である増野光教氏は、フチたちが話していたアイヌ語を一つ一つ思い出して記録するようにしている。いくつかの例をあげておく。

１，あなたたち　白糠ではアノカイと言う。敬称のあなた様のアンにオカイがついてアノカイとなる。
２，私たちは　　白糠ではアヌタリと言う。私という意味のアンにウタリがついてアヌタリとなる。

この２つの人称代名詞の外に、単語は80ほど思い出している。その一部の例をあげておく。

１. メノイェ　寒い	２. ヒンナ　ありがとう	３. ライクル　この野郎
４. トゥシテク　黙る	５. パケ　頭	６. ピセ　腹
７. ハイヤー　情けない	８. オノノ　でかした	９. イパカリ　はんかくさい
１０. エイヨッ　わけてくれ		

MEMO

「今日の一言」メノイェ／寒　い
menoye

寒いというアイヌ語は、全道的にメアンmeanが使われている。メノイェは美幌方言にあるが、白糠方言は美幌と共通しているものが多い。アイヌ社会の時代から美幌と白糠は人的交流が活発で、白糠アイヌで美幌から移り住んでいる人がたくさんいる。

Lesson 7　タンタカ山

今日のポイント
海上から指標となる山

今日の一言：
タンタカ
tantaka
タンタカ（カレイの仲間）

タンタカ	アナクネ	サマムペ	レエ	ネ	ルウェ	ネ
tantaka	anakne	samampe	rehe	ne	ruwe	ne.
タンタカ	は	カレイ	の名	であります。		

アトゥイ	カ	タ	アン	チプ	アナクネ
atuy	ka	ta	an	cip	anakne
海	上	に	いる	舟	は

タンタカヌプリ	ヌカラ	ワ
Tantakanupuri	nukar	wa
タンタカ山	を見	て

シウシケ	エラムアン	ルウェ	ネ
siuske	eramuan	ruwe	ne.
自分の（いる）場所が	わかる	のです。	

；単語

- タンタカ［カレイの仲間］
- アトゥイ［海］
- ウシケ［場所］
- サマムペ［カレイ］
- チプ［舟］
- エラムアン［わかる］

解　説

タンタカ山は上庶路（かみしょろ）と縫別（ぬいべつ）を結ぶ中間点にある標高297メートルの山で、「昔タカノハ鰈（ちょう）がここまで遡った」という伝説がのこされている。この川名、山名、字名などに鍛高という漢字が当てられた。この伝説をうらづけるカレイの化石がここで発見されている。タンタカ山は海上の船にとって自分の位置を測る指標となっている。

MEMO

「今日の一言」タンタカ／タンタカ（かれいの仲間）
tantaka

タンタカはヒラメ、タカノハ鰈などのかれい科の魚のことである。ふつうカレイ類の総称としてはサマムペsamampeが使われるが、白糠や屈斜路（くっしゃろ）ではカレイの成魚のことをタンタカと言い、ヒラメもマツカワもタンタカと言った。

Lesson 8　白糠のイオマンテ

今日のポイント
熊の霊送り

今日の一言：
キムン　カムイ
kimun　kamuy
山の　神（熊）

イオマンテ	ヒ	タ	アナㇰネ	アイヌ	メノコウタㇲ
iomante	hi	ta	anakne	aynu	menokoutar
熊送りする	時	に	は	アイヌの	娘たちが

ウポポ	シノッチャキ	ルウェ	ネ
upopo	sinotcaki	ruwe	ne.
ウポポを	歌い	ました。	

；単語

- キムン［山の］
- イオマンテ［熊送り］
- ウポポ［座り歌・輪唱歌］
- カムイ［神（熊）］
- メノコ［娘］

解　説

戦前白糠では昭和11年1月5日石炭崎のコタンでイオマンテが行われたという記録が残されている。

昭和22年和天別駒越（こまごし）でイオマンテが行われたのが、最後になった。それには仔熊（ペウレㇷ゚）を生け捕って、二年ほど愛情を注いで育て、冬の猟期の始まる12月に盛大にイオマンテが行われる。イオマンテというのは、先に天界に霊送りされている親熊の神の許へ帰す儀式のことである。

カムイ	オプニ	ナ	ホク	トウンケ	ヘ	トウイ
kamuy	opuni	na	hok	tunke	he	tuy
熊よ	起きれ	よ	早く	移って		移る（よ）

（歌い手のまま）

MEMO

「今日の一言」キムン　カムイ／山の神
kimun　kamuy

熊というアイヌ語は、カムイ（神）だけでもよいが、キムン　カムイとも言う。イオマンテのイはそれという意味で熊のことである。オマンテは送るということで、イオマンテで熊送りということになる。地名では熊やヘビのように恐ろしい神の名を呼ぶのをはばかって、イ（それ）とだけ言う。茶路川の上流、二股の手前にイロベツ（イ　ル　オ　ペッ　i ru o pet 熊の足跡がある川）がある。

Lesson	9	アイヌ文様（もんよう）

今日のポイント
アイヌ文様

今日の一言：
ケメイキ
kemeyki
刺しゅうする

アイヌ	イミプ	アナクネ	ピリカ	ヌカレ
aynu	imip	anakne	pirka	nukare
アイヌ	衣	は	美しく	見せる

ヒ	クス	パテク	ケメイキ	カ	ソモ キ	ワ
hi	kusu	patek	kemeyki	ka	somo ki	wa,
ことの	ため	だけに	刺しゅうする	のでは	なく	て、

カミヤシ	オケウパ	クス	キ	ルウェ	ネ
kamiyas	okewpa	kusu	ki	ruwe	ne.
悪魔	を追い払う	ために	する	のです。	

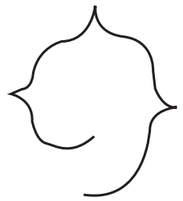
；単語

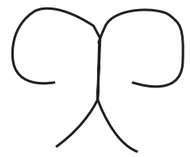
- ケメイキ［刺しゅうする］
- ヌカレ［見せる］
- オケウパ［を追い払う］
- イミプ ［衣］
- カミヤシ［悪魔］

解　説

アイヌ文様にはモレウ文（渦巻文）とアイウシ文（とげのある文）とウタサ文（相対文）などがある。これらの文様は袖口、襟、裾まわりに刺しゅうされている。このように着物の入口に文様を刺しゅうするのは魔ものが体内に侵入するのを防ぐためと考えられているからである。後背部分の大きな文様は人間には背なかが見えないので魔除けのために刺しゅうをした。

モレウ文


アイウシ文


ウタサ文

MEMO

「今日の一言」ケメイキ／刺しゅうする
kemeyki

ケメイキはケム（針）、エ（それで）、イキ（する）という語から成りたっている。アイヌメノコは、ケム（針）、ヌイト（糸）、センカキ（布）を使って縫物や刺しゅうをして、ピリカ　マタンプシ（美しい鉢巻）、ピリカ　テクンペ（美しい手甲）、ピリカ　ホシ（美しい脚（きゃ）はん）を恋人に贈ることを唯一の楽しみにしていた。

Lesson 10 鯨の話

今日のポイント
伝説の中に出てくる鯨

今日の一言：
フムペ　ヤン
humpe　yan
鯨が　陸に上がる

テエタ	アッケシ	ネワ	シラリカ	ウトゥッタ		
teeta	Atkes	newa	Sirarika	utur	ta	
むかし	厚岸	と	白糠	の間	で	

トゥミ	アン	ハウェ	ネ	トゥアン	トゥイタク	オッタ
tumi	an	hawe	ne.	tuan	tuytak	or　ta
いくさが	あった	ようです。		その	物語	のなかに

“フムペ	ヤン！”	アリ	アイェ	イタク
" humpe	yan"	ari	a=ye	itak
「鯨が	陸に上がったぞ」	と	いう	言葉が

アン	ルウェ	ネ
an	ruwe	ne.
あり	ます。	

；単語

- フムペ　[鯨]
- トゥミ　[戦い]
- イタク　[言葉]
- ヤン　[陸に上がる]
- トゥアン　[その]

解　説

遠い昔のことである。厚岸と白糠のアイヌの戦いで、白糠勢がオトベのチャシにたてこもり、厚岸勢は攻めあぐんだ。ついに、厚岸勢は一策を案じ、夜半に砂で浜辺に鯨の形を作り、その上に魚を置き、油をまいて「寄り鯨」に見せかけて、そのかげに軍隊を伏せておいた。夜が明けるとたくさんのカラスが群れ集まってさわいだ。白糠勢はすでに食料の欠乏に苦しんでいたので、これを見て「寄り鯨だ！それ行け」と武器を持たずにチャシを飛び出したところを、厚岸勢のためにさんざん打ち破られたという。

MEMO

「今日の一言」フムペ　ヤン／鯨が陸に上る
humpe　yan

鯨が波に打ち寄せられて陸に上ることを寄り鯨という。フムペ　ヤン！鯨が陸に上がったぞ！というとコタンは騒然となり、人々は血相をかえて海岸にかけつけた。鯨の肉と油は、コタンの人たちにとってかけがえのない大切な食料であった。
また、鯨のひげは楽器の飾りに使われたし、筋（すじ）は弓の糸に加工したと言われている。

Lesson 11　鮭をとる

今日のポイント
カムイチェプ

今日の一言：
マレプ
marep
回転銛（もり）

アイヌウタラ	アナクネ	マレプ	アリ
aynuutar	anakne	marep	ari
アイヌの人たち	は	回転銛	で

カムイチェプ	コイキ	ルウェ	ネ
kamuycep	koyki	ruwe	ne.
鮭	をとり	ました。	

タンネ	ニ	エトゥフ	タ	マレプ	エコテ	ワ
tanne	ni	etuhu	ta	marep	ekote	wa
長い	木	の先	に	回転銛	を結びつけ	て

チェプ	コイキ	ルウェ	ネ
cep	koyki	ruwe	ne.
魚	をとり	ました。	

；単語

- マレプ［回転銛］
- タンネ［長い］
- エコテ［～に～を結びつける］
- コイキ［をとる］
- エトゥフ［の先］

解　説

アイヌの食生活の中で、鮭のことをシペ（sipe 主食）と言って、一番大事な食物であった。それで、鮭のことを神から与えられた魚として、カムイチェプと言っている。松浦武四郎の『久摺日誌』の中で、アイヌが摩周湖の中の鮭を指してカムイチェプと言ったとある。

カムイ	チェプ	アリ	チオカイ	チポロセ
kamuy	cep	ari	ciokay	ci=porse.
カムイ	チェプ	と	私たちは	言った。

（知里真志保著『分類アイヌ語辞典動物編』カムイチェプ参照）

MEMO

「今日の一言」マレプ／回転銛（もり）
marep

マレプというのは、マ（泳ぐ）、レ（させる）、プ（もの）、泳がせて魚をとるものという意味になる。回転銛は、鋭い鉄製の曲がった先が魚を刺すと、自動的に銛が回転して、どんなに大きな魚でもその鉤（かぎ）から逃げ出せない仕組みになっており、いとも簡単に魚を引き上げることができる。長い竿の先にとりつけてマレプを川の流れに沿って静かに泳がせながら、瞬間的に魚めがけて突き刺すのである。

Lesson 12 食料をどうやって保存しているか

今日のポイント
保存食としての鮭

今日の一言：
ルイベ
ruibe
融かして食べるもの

アイヌウタラ	アナクネ	カムイチェプ	カ	カム	カ	キナ	カ
aynuutar	anakne	kamuycep	ka	kam	ka	kina	ka
アイヌの人たち	は	鮭	も	肉	も	山菜	も

トゥナ	カシケ	タ	ウサム	カネ	アリ	ルウェ	ネ
tuna	kasike	ta	usam	kane	ari	ruwe	ne.
火棚	の上	に	並べ	て	置く	のです。	

；単語

- ルイベ［融かして食べるもの］
- キナ［山菜］
- ウサム［並べる］
- カム［肉］
- トゥナ［火棚］
- アリ［置く］

解　説

アイヌは鮭だけでなく、肉類、植物すべての食料を、年中いつでも食べられるように保存した。保存法としては乾燥と凍結の二つがあった。乾燥法は食料を炉端の上に吊ってある火棚の上において、自然と乾燥させくんせいにした。凍結法は魚やいもなどを雪中に埋めておき、食べるときに取り出して調理

MEMO

「今日の一言」ルイベ／融かして食べるもの
ruibe

ルイベのルは凍らすのではなく、融解するという意味である。ルには凍らすという意味はない。イベは食べ物の意味である。したがって、ルイベとは、凍らせた食べ物を融かして食べるものということになる。

Lesson 13 白糠の先住者

今日のポイント
アイヌ弔魂碑（ちょうこん）

今日の一言：
シンリッ　コイチャラパ
sinrit　koicarpa
先祖　を供養する

ケシパ	アン	コロ	シマウタチェプ※	タ	アイヌウタラ	アナクネ
kespa	an	kor	simawtacup	ta	aynuutar	anakne
毎年毎年			八月	に	アイヌの人たち	は

シンリッ	コイチャラパ	ルウェ	ネ
sinrit	koicarpa	ruwe	ne.
先祖	を供養	します。	

イノミアン	ヒ	タ	ポロンノ	アウタラ	ウウェカラパ	ワ
inomi=an	hi	ta	poronno	a=utar	uwekarpa	wa
祭をする	とき	に	たくさん	仲間が	集まっ	て

ウコ　シノッチャキ	ウコ　リムセ	ルウェ	ネ
uko-sinotcaki	uko-rimse	ruwe	ne.
共に歌ったり	共に踊ったり	します。	

※アイヌの月の名称は気候や植物の生育状況などをもとにつけられたものが多いので、地域によって異なっている。本文のシマウタチェプは山本多助著『アイヌ語小辞典』からの引用で、「大いに女性が採取する月」という意味である。

；単語

- シンリッ［先祖］
- ケシパ［毎年］
- シマウタチュプ［八月］※
- ウウェカラパ［集まる］
- シノッチャキ［歌う］
- コイチャラパ［を供養する（コが付いて他動詞となる）］
- ケシパ　アン コロ［毎年毎年］
- イノミ［祭をする］
- ウコ［と共に（接頭辞）］
- リムセ［踊る］

解　説

昭和54年（1979）年8月15日、白糠先駆者アイヌ弔魂碑が東山公園の太平洋岸を一望できる小高い丘の上に建立された。

碑　文

白糠はアイヌ語のシラリカ（潮溢るる処という意）から名づけられたもので北海道でも自然の恵み豊かな集落として早くからひらけた由緒ある土地です。この白糠の源はまさに先駆者としてのアイヌ民族の尊い努力によってつくりあげられたものであります。

白糠開祖の礎として貢献されたアイヌ民族の遺業を偲（しの）びこの地に骨を埋めた先人アイヌを顕彰するためここに全町民の総意をもってこの碑を建立いたします。

建立の次第

この碑を建てるに当って北海道ウタリ協会白糠支部は、白糠在住全ウタリ賛同のもとに、町内各層の有志に計り、発起人会をもって白糠町名誉町民青木金吾氏を会長とする建立期成会を発足させ、白糠町及び全町内会の全面的な支援を得て町民の浄財を仰ぎ、発起人一同と町内有志、全ウタリの協同の力をもって、ここに白糠先駆者アイヌ弔魂碑の完成をみたものである。

MEMO

「今日の一言」シンリッ　コイチャラパ／先祖供養する
sinrit　koicarpa

イチャラパはイ・もの、チャラパ・ばらまくという語義から成り立ち、先祖を供養するために食物をばらまくことをいう。酒がす、たばこ、菓子、果物などの食物をアペオイ（いろり）の中のアペ（火）にばらまいて、カムイノミをする。